

東西の解剖書『ファブリカ』(1543)と『解体新書』(1774)の共有性——伝統医学と近代化による図像イメージ

高田嘉宏 (大阪大学)

人体内部の構造がまだ未分類であった時代、人々は身体をどのように想像していたのか。ここでは、中世を経て近代にいたるまでの解剖図像の変遷を中心に見ていく。伝統医学に強く依存していた思想や認識は、近代に入り科学的な実践と観察によって分類・体系化され、新たな概念的水準に達するようになった。そして、この変化に大きな影響を与えたのが、視覚的に表象された解剖図譜であった。

東西の近代解剖学を代表する書籍には、アンドレアス・ウェサリウス(1514-1564)の『ファブリカ』(1543年)と、杉田玄白(1733-1817)、前野良沢(1723-1803)らの翻訳による『解体新書』(1776)がある。この2冊に関する論文は、これまでに多くあったが、文化的背景や思想的変貌から、解剖図像を分析するものがあまりなく、また美術史の観点からの比較研究が少ない。本論では、東西の解剖図像を比較することから、この2冊の成立背景を通じて、近代化がはたした図像イメージの変貌から、解剖図が美術史に与えた影響を論じる。

西洋医学では、古代医学が中世時代の写本という方法で受容・保存された。中世初期には、解剖書の内容を忠実に理解することが重要視され図譜の必要性が軽視されていた。西洋医学の祖ともいえる解剖学者・医学者のガレノス(129年頃-219年頃)の著作は、基礎医学における絶対的な権威とされた。その理論は、ヒポクラテス(BC460頃-BC370頃)の四体液説に基づき、臓器の配置や機能が、その理論に従って記述された。これは古代から初期近代にかけて医学研究の基礎概念となり、人の気質や性格にも影響を与えていた。

東洋医学では、古代中国において形成された陰陽五行説を基盤とする伝統医学が整備され、それが漢籍を通じて日本に伝わった。これは漢方医学において、人体を五臓六腑という概念で捉えられていた。五臓は、肝・心・脾・肺・腎を。六腑は、胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦を指した。これらは具体的な臓器ではなく、精・気・血を貯蔵し、循環する機能の暗示的な総称であった。このような概念は陰陽五行説の思想体系の中で位置づけられ、東洋独自の解剖学的解釈を通じて図像形成された。

『ファブリカ』と『解体新書』は、上記にある時代背景の中で発版された。この二冊は時代も地域も異なるが、いずれも、それぞれの社会的・歴史的背景の中で図像化されている。これは近代化の進行とともに、古典的な哲学や神学的な枠組みが、ようやく見直され実践に基づいた科学の萌芽が現れてきたともいえる。これは前時代の伝統医学を受け継ぎ、観察を基盤とした近代科学の始まりでもあった。こうした変化は、次の時代における生命現象を科学的に記述する基礎概念となった。解剖図の図像イメージは、人体の生命現象を解明する科学的手段であると同時に、人体観や生命に対する思想や価値観の変化とも密接に結びついていることを、解剖図像をとおして検証する。